

怪力・鬼

堀 藤吉郎

一度に三石三斗の水桶を担う怪力の姥

名勝高崎山は大友氏代々の城塞があったが、今は荒廃して頂上には狼火釜のろしがまが残っている。初代大友能直よとなおより四百年、代を重ねること二十二代にして亡んだのだが、この山城について悲惨な伝説がある。

頃は天正十四年の三月、高崎山の城に住む一人の下婢があった。大力無双の女丈夫であるが下賤の身で只姥とのみ呼ばれていた。

この姥は山上の水溜めに城の腰という所から毎日々々水を汲み揚げるのが仕事であった。

一度に三石三斗入りの水桶を背負って坂道を一日に何回となく上下しては頂上の水溜めに入れていた男勝りの女であった。

何千騎という軍兵の綱と頼む水を一人で引き受けていた。

冬が過ぎ春となり三月の桃の節句を後一日という日、専制な城主は姥にいう。

「明日は一年一度の節句である。今日の汲み上げは休んでよかろう」。しかし姥はそれに答えて、

「明日はお節句、休ませてもらいましょうが、明日の休みに使う水を汲み終わってから休みのお言葉を賜りたい。宵節句は出来るだけ御奉公を仕ります」。桶を背負ってさっさと山下の井戸に向かって行った。

「余の命に従わざる奴。思えばこそ云うのに何たることば。無礼者めが」。満面朱を注ぎ家臣に姥を討ち取って参れと下知をしたのであった。家臣の者一人は山を下り、城の腰の手前の茂みのなかに潜み姥の来るのを今か今かと待っていた。

殺されるとも露知らず君に忠実な姥は重い水桶を背負って登って来る。行き過ぎさせて後から「エイ」と掛け声諸共切り捨ててしまった。

山上には水はない。屈強な家来は寄ってたかって水を

井戸から汲み上げるが、姥のように一度に三石三斗も担いで登る者として一人もない有様で、水に困ってきた。

水に苦勞を重ねあぐねている折から、突如として急使が着いた。それは臼杵の丹生島の城からである。島津軍は君公家久を総大将として先鋒は大挙して高崎山城を囲まんと攻め寄せて来る。

ついに城は囲まれ籠城の憂き目をみてしまった。大友軍には騎虎の将はあれども水の欠乏は軍兵の戦意を失ってしまった。しかし高崎、七蔵司から田の浦にかけての穀倉を持っている大友軍には兵糧は充分貯蔵していた。島津軍は、山城に水の無いことを知って益々水攻めの策に出たので、敵を欺く戦略から、軍馬ばを頂上の広場に立たせた。そして、どんどん白米を軍馬の足に打掛け有り余るほど水があることを見せた。城中の者は、こんな事をして山下を遠巻きしている敵の機先をくじいていたが、これにも限りがあること最早落城を待つばかりとなってしまった。

折から羽柴秀長が九万の大軍を引き具して援軍に来たのである。これを知った島津軍は総退陣して耳川へ走っ

てしまったのである。

高崎山登山は赤松峠を右にとつて登るが、城の腰部落に着く手前の路傍に姥の隠し井戸というのがある。これが毎日三石三斗の水桶を背負って水を汲んだ井戸であると云われ、城の腰から五・六百メートルばかり登った所に木の茂みがある。ここに姥の墓と称するものが唯一淋しく苔むして立っている。高さ三尺位四面に梵字が彫り込んであるが、何と読むのか判らない。ここで姥が殺された後の人が供養のため建てたものである。

何でも、明治初年、大分市生石の僧侶がこの墓の下に大友の埋蔵金があるという言い伝えから内密で掘ったら腹痛を起こして死んだということである。頂上から水と見せ掛けて馬の脚を洗った白米が段々落ちて積もった所が今は米山という地名になっており、その後ここには米が出来ないとも云われた時代があった。大友軍が血刀を洗った池を太刀洗い水と呼んでこれらの箇所が皆残っているのも悲惨な物語である。

仙人の手伝いをする山猿

別府市と大分市の境界、高崎山の西麓、鳴川の細道を上がること四百メートルの所に山神社の石祠が松林に囲まれている。高崎山の荒下しという岩崖を背に受けた景色のよい丘で一寸したハイキングの場所である。ここを登り詰めると釜の口という恐ろしい断崖がある。大蛇の伝説のあるところで、大蛇が住んでいると云われ、この山神社について山猿（ヤマワロ）の話が伝わっている。山猿は山童とも云って九州のみに成長した怪物である。

山童は人間と猿の混血の子らしく、脚が長くて夜は炭焼や仙人の山小屋とか山寺の炉辺に来て喰物をねだると云われ、乙原の深山にもよく出てたという。時々出て来て仙人や炭焼きの仕事を一生懸命に手伝ってくれる怪物である。

永正年間、高崎山の麓から赤松谷にかけては大森林であったが、炭焼や仙人が入り込んで小枝は炭に大木は木材にと一生懸命に皆伐が始まった。炭焼たちは、この木なみなら二年は切り尽くすのにかかろうなど話し合っ

は木を伐倒していた。所が何処ともなく十才位の子供に似て毛は柿色をして手の長い怪童が現われて、物も云わず伐り倒す大木を軽々と引きかたげ谷を渡り峰を越えて積み場に持って行くのはよいが、昼になると喰物をねだる。喰物をあたえようと山の中に逃げてしまう。次の日も山童が現われて仕事の加勢をするのでその日の仕事は早く片付いてしまうが、不思議なことには人間より先には行かない。仙人もその「コツ」をやって仕事も順序よくやって仕事が終わると喰物をあたえていた。この怪物塩気のあるものは嫌いともえて一切喰わないのである。

二年もかかろうかと云うこの谷の森林も、手伝いが毎日毎日続いて半年も立たない内に伐り尽くしてしまったので、仙人はまた場所を変えて他の山へと移っていった。そしてこの地に祟りを恐れて山神祠を建てて山童を祀ったのが今の山神社で、山商売の人々は必ずこの山神にお参りする。

山童は人には決して害を加えないものであると云われているが、こっちから打ったり、殺したりすると不思議に祟りをなし、発狂したり大病にかかって死んでしまう

とか、その家は俄かに火が燃えだして色々の災難が起こって大変なことになってしまふ。加持祈禱をいくらやっても効果がないといっている。

冬季よりも春にたくさん現われるということである。

別府地方には山の神を祀った祠が多い。山間の部落には五十八祠程もあるのも面白い。いかに別府の山には山童が沢山棲息していたかが判る。山の神の多い土地は反面山仕事をする者が多かつたということにもなる。

橘南溪が天明年間に書いた「西遊記」にも「九州の深山に俗に山獠というもの多し、その形大なる猿の如くにして、常に人の如く立って歩く。毛の色甚だ黒く、山の寺などには毎度来たりて食物を盗みくらう。然れども塩気あるものを甚だ嫌えり云々」とある。

枝郷の部落にも山神を祀つたお宮があり、室町時代の文亀二年の六月に勧請したということである。寛政九年編輯の玖珠郡誌には、明和年間万年山の絶頂の岩の上に山獠の石子（ミイラ）を発見したことが記されている。

剛勇挟間四郎直重の怪力

野口にカムゲイシと云う地名がある。この地の荒金某の屋敷内に巨石を土台として二重に累ねた大石がある。この石を重ね石というところから付近の地名が重石（カムゲイシ）となったといわれ、昔は家一軒ない淋しい狐狸さえさまよう森林であった。路傍の松林中にあったが今は付近の開けて住宅地となり屋敷内の庭石として昔のまま保存されている。

この石について豪快極らない伝説が未だ古老の間に物語られている。

豊後府内の城主大友大炊助親秀の四男坊に大炊四郎直重という弱冠ながら剛勇無双の武者があった。実の兄である兵庫頭頼泰もあまりにも大力にして智者の弟、弱冠者にしては出来すぎるので何かにつけ末恐ろしくなり、将来を思い、父と相談をして大分郡挟間村に封じて分家させてしまった。そのため、大友の姓より地名をとって挟間と改めてしまった。

猫の額の地挟間の生活にも飽きて、かねて聞き及んだ物珍しい速見の一目をあちこち見物せんものと、供をつれて別府に遊び、それから官道を古市へ向かって歩を運

んで行った。まだ日が高い夏のひととき、熱さしのにぎに松林の陰に涼を求めて、一同の供の者にしばらく憩いを命じた。土分の軽い者から下郎足軽の連中は休みの間に相撲をとったり、力持ち・腕くらべなどをやり鼻高々と白慢話に花を咲かせていた。

その話を聞いた直重は面白半分付近にある大岩石を指して、

「力自慢の者共、その石を余の面前に持ってまいれ、持ち来る者には上下を問わず恩賞を取らすであろう。」

供の者ともは、色青ざめ且は驚きの声を立てるものは一人もない。やがて、一人の下郎がおそるおそる手を仕えて、殿と大石を三七に見比べながら、

「いかに殿様、何がなんでもあの大石、人間業では動かすことは出来ませぬわい」。直重はやおら立ち上がり「身の程を知らぬたわけ者、取るに足らぬ其の方等の力比べで何ができようぞ」。

つかつかと大石に近づき、両手を差し伸べて軽々と頭上高く差し上げ、あちらこちらと持ち廻る有様、その軽々さは綿の塊でも持つようである。供の者は怪力無双に物

も云えなかった。持廻ったあげくの果ては、その大岩石を付近にある巨石の上に静かに置いて汗一つかかず涼しい顔で元の青草のうえにどっかと座り、呵々と豪傑笑いをした。

このことがあって幾年が過ぎたが、この大岩石を動かす大力者もなく、付近の大小名をはじめ強力自慢の者共も直重の怪力を聞き伝えて恐れをなしたということである。その後人云うことなくこの大岩石を挟間直重の重石と伝えるにいたった。このような勇猛無双の武士であるというので鬼挟間という異名冠しられた程である。

文永十一年の夏、蒙古の大軍が日本を犯さんとして筑前の多々良の浜に上陸した。救国の諸将は時を移さず馳せ参じて元軍と戦ったが、元の大軍を防ぐことも出来ず既に敗軍の憂き目を見らうとした時に、直重は真つ先に進み出して船の帆柱を持って振り廻し元軍の主力にあり難なく敵を打ち伏せ、死するもの数知らずという。

鬼神の如き奮戦によってついに元軍を総退却させ、勇名を天下に轟かした。大石を重ねて下郎小者の慢心を戒めた鬼挟間大炊四郎直重にふさわしい豪傑物語である。

直重の兄頼泰は有名な豊後国田帳を鎌倉幕府に注進した人で、元寇の役には弟直重と共に蒙古の大軍に当たり戦功をたてたが、入道になり名を道忍と号し鉄輪の温泉を改修し、文永・弘安の役に傷ついた勇士を收容し温泉治療をやった創始者である。

鬼が一夜に築いた竈門八幡の石段

竈門荘の総鎮守で、聖武天皇の神亀四年三月十五日に宇佐神宮の創始者である大神比義の創祀であると伝えられる竈門八幡は、亀川の国立別府病院の西方の亀山に鎮座している古社である。欽明天皇の二十一年、宇佐郡菱形の池に應神天皇の御神霊が現われて大神比義に御神託があり、

「我は嘗田天皇広幡磨なり。竈門の神は八幡の叔母なり。三十五人を加えて三十六人神とせよ」

というお告げによって神膳三十六を供えている珍しく祭神を多くもっている神社であって、宇佐神宮領の古社で境内には神宮寺の址をあちこちに残しているのである。

六面塔や宝塔なども神さびた神域は流石に伝統の貫禄

を示している。

地頭職の竈門氏は武将として代々大友家に仕えていたが、天正十四年十二月戸次川の戦いに出陣して島津軍と戦い長曾我部信親と共に討死にしまったので、代々寺屋敷の土屋氏が神社のことを司どって現在に続いたのである。

この竈門神社に鬼の伝説が伝わっている。古い昔竈門の荘には悪鬼が住んでいて夜な夜な現われて里人を喰い殺したり農作物を荒し廻っていた。里人はこれでは困ってしまふ。何とかして鬼を封じてもらいたいと竈門八幡に参籠して、鬼を殺してもらうことを祈願したのであった。折から神前の霞の中から御神言があつて、

「其の方等の祈願によって、きっと其の悪鬼を退治して使わずぞよ」

里人一同は神託に喜んで我が家へ帰った。

それから人間の代表に頼まれた竈門八幡と鬼とが約束を取り交わした。其の約束というのは鬼が御供え水 downstreamの拝殿まで一夜に百段の石段を築き上げたら、今後は毎年人間を人身御供にやる。若しできなかつたら、今

後決して村へ出てくることはならぬというわけである。

鬼は容易なことだと一も二もなく承知して一生懸命の石段を築きはじめた。大きな石をあちらの谷こちらの川から運んで、工事はたちまち進抄して、ついに九十九段まで出来上がってしまった。その時、神様がどうだまだ出来ぬかと聞かれると、鬼はほっと一息ついて、

「あと一段だ」

というと、知恵のある神は笠でミノを叩いて鶏に寸分違わぬ声で「コケコッコ」とやってのけた。朝のいちばん鶏が鳴いたので、鬼は驚いて姿を消してしまい、その後約束通り出てこなくなった。

竈門の荘の人々はこの靈験あらたかな神様であるといつて崇め奉ったということである。

竈門神社の参道は鬼が一夜で築いた参道で、九十九段あったと云われるが、いまは、下の方に道路が通り切り取られてしまって昔の面影はない。下の方は念入りに築いたもので立派に積み重ねているが、だんだん時間がなくなつて上の方は荒くなり、丸石をそのまま積み重ねたままになっている。

景行天皇に蹴上られた大石

別府温泉から山の湯、湯由布院の仙境に行く観光道路の中間に、鳥居という昔の宿場の峠がある。ここは志高湖に行く道と由布川溪谷と山の口溪谷に行く道の分岐点であり、峠の鳥居を抜けて鶴見岳鎮護の神火男火売神社の参道に登っている。この参道の両側が雑木林にかかった所から急坂になって来るが、この付近の道の左側に景行天皇蹴上の石というのがある。注連縄を張り巡らして神石として崇めている。

景行天皇が、熊襲を御征伐のため豊後に来られた秋、周防の佐婆津から別府へお着きになり、この地方の長である速津媛の出迎えをうけて熊襲のことを聞かされた。

媛は石垣に住んでいる土蜘蛛など狂暴な賊がいることを奏言した。天皇は石垣の土蜘蛛を平らげ、城島台に幡居する賊の征伐に軍を進めた。ここの首領は鬼切丸という妖刀を持ち自分を指揮して立ち向かってきた。天皇はご立腹になって大岩石を賊の密集している中に蹴上たので、敵は天皇の剛勇ぶりに恐れをなして由布院の方に退

却したといわれる。

天皇が近く流れで口を漱がれたので、この川をお漱ぎ川と土民がいったのが、今の小杉川であるといわれる。

由布岳の手前の山を飯盛（イモリ）ヶ城といつて、天皇が軍勢を指揮された行在所があった。天皇が其の頂上から雄大な景色を眺められて、「嗚呼広大なる碩田（カワラダ）かな」と褒められたそうである。碩田ヲオオキタと読むことから後の人が大分と改めたという。この城島一帯には景行天皇についての伝説が散在している。

由布院干拓の女神と蹴裂権現

別府を西に隔たる二十四キロの地、秀峰由布岳麓の仙境、夏の蜩と狭霧と温泉で太古の静けさをもつ由布院の町が盆地いっばいに朝霧が雲海のように浮かんたり沈んだりしている。九州の軽井沢という別名さえ持っている山の温泉郷である。別府の奥の院として宣伝されているこの盆地は太古は大きな湖であったという。

昔、合の原を生んで由布岳の神となられた宇奈岐日女の神が、力自慢の権現をつれてやってきて、この高台か

ら周囲の雄大な景色を眺めていた。福刀（伏魔）・平家・カルト・酒天童子・万年・野稻・倉喜と大きな山々が連なっているその中に、大きな湖水が満々と青味がかつた神秘そのものの水を湛えている。

女神は、この湖水に目を落としてじっと見つめ、何か頻りに考え込んでいたが、暫らくして女神は供の権現を見返して云うのには、

「この湖水の壁を破ってこの満々とした水を引いてしまふと美しい実りが出来る。多くの者共が住まいして農業が出来るであろう。」とつぶやき、前に見える山裾を力のあらん限り蹴って蹴破ってみよとお命じになった。

「力のあらん限り生命の続くかぎりこの大役をはたしてお目かけます。権現一生一代の働きです。」

権現は、前徳野という一番この湖水で壁の薄いところを見つけて、雷のような力のこもった掛け声と共に、恐ろしい逞しい足でどんどん地響きをたててとうとう蹴破ってしまった。湖の水は瀬を打って怒涛のように飛沫をあげて流れて行く。

何か月かの後、さすが満々と溜まっていた湖水は、女

神が腰掛けた岩の下手に小さな池を残して一本の小川となつて大分川の本流へと注いで流れ下つてしまつた。この小さな池が今の金鱗湖と云つて半湯半水の池で、由布院名所の一つになつてゐる。

水が引いたのを見届けた女神は、各地から民を集め、この盆地を開拓して豊饒な実りをもつ美田としたのである。柚富郷という大きな村が出来あがり、毎年、豊沃な土地には黄金の穂波を秋風が運んできた。村人は柚富郷開拓の大恩人である宇奈岐日女の神徳を崇めて社殿を創建したのが、宇奈岐日女神社で、別名六所宮である。

一方、大脚力で前徳野の岸壁を蹴破つた権現を同時に恩人として祀つたのが、いま前徳野に鎮座まします蹴裂権現社であり、ご神体は権現が最初に蹴つた石であると云われている。

六所宮の神事でお神輿は、蹴裂権現の土木工事を眺められた女神が腰掛けられた大岩に、御神幸されるのである。

菡海漁談

脇 蘭 室（抜粹）

鶴見山は海岸を距こと一里ばかり、高峻由布に比しては譲る所あり、火脈の発動は更に甚し。山上に池あり。沸熱殊に盛にして、煙氣の騰起する事白雲の如し。昔時も地変によりて、人死し家流れし事あり。享保年中には山潮出て、田圃村落悉く壊亡し、人民馬牛多く溺死せりとぞ。今より数年前にもかくの如き変あり。されど此所の人民、前事に創艾して、地を擇て村を移したるを以て其災輕かりしとぞ。この躍石と称する巨石あり、時ありて自躍りて移ると云。其響數十丁外に聞ふとなり。予いまだ石を見ざれども、響と云ものは少年の時はるかに聞たることあり。

山下には温泉所在に出るなり。中にも南鉄輪村には、鬱蒸の氣を蔵め包み、材を構へ草土を覆ひて窟の如くし、